



法 話

人にも勝さるお猿の慈け

石 橋 誠 道

皆さん大勢うち揃つてよく来て下さいました。今日は四月七日で、私たちの最も尊敬してゐる法然上人さまの御誕生日であります。ほんとうに暖かいよい時で、野にも山にも色々の花が咲き亂れ、蝶も嬉しく舞ひ遊び、小鳥も楽しく囀つて、なんとも言はれないよい氣持であります。こんな好い時に皆さんが、なかなくこゝに集つて、先生から色々な面白いお話や、爲になるお話を聞かるとこは、なんぞ喜ばしい事ではありませんか。法然さまもこのよい時にお産まれ遊ばして、多くの人々を教化して下さつたので、今なほ日

本全國の人から、聖人である偉人であるまで、常に拜まれてゐらつしやるのであります。それこいふのも全く法然さまが、本當に慈け深い方であつたからであります。慈けの深い心がけは、この世の中で最も貴いものであります。

今日は皆さんのよく知つてゐらつしやるお猿さんのお話を致します。このお猿さんは、大變に慈け深いお猿さんでありました。今から四五年前、信州長野縣のある山奥に、一人のやさしい仙太郎さんといふ木挽さんがありました。毎日々々山に行つて大きな鋸で木を挽くのが仕事であ

りました。ある日の事、仙太郎さんが小屋の中で、ゴシリゴシリ木を挽いておりますと、あちらの方から二三十疋のお猿が群をなして、木から木へ、枝から枝へこ傳はつて來ました。そうしてそのお猿は木挽さんの居る小屋の上に飛びおりました。それからそれらが物騒がしくキャツキャツ鳴きつゝ、力をそろへて其の小屋を揺り初めたのであります。多勢のお猿でありますから、遂には小屋が倒れんばかりに揺れたのであります。そんな惡戯をするものですから、木挽さんは大變に怒りまして直ちに飛び出して石を投げてそれらのお猿を追つ拂ひました。お猿はびつくりして一疋も残らず、いづこにもなくにけ去りました。が然しまた二三日を経て、同じやうにやつて來ました。今日も前と同じやうに、そ

の小屋を揺つたのであります。木挽さんはこの時も又た石を投げて追つ拂ひましたが、その後たび／＼その通りの悪戯をしますので、おこなし木挽さんもたまりかねて、なんこかしてこの猿を困まらせてやらう、そうして再びこゝに來ないやうにしたいものだ、色々考へてゐる内に、遂によい事を思ひつきました。

あゝそうだ、この猿たちを困まらせてやらう、そうして再び來ないやうにしたいものだ、それにはこの小屋の周圍の樹木を悉く切り拂つて、お猿の群が木から木に傳はつて來るここの出來ないやうにするのが最もよい方法である。そうして今まで幾度も悪戯をした敵討ちに、お猿を二三正生捕にしてやらうと考へました。そこでその小屋の周圍の樹木を悉く切り倒しましたが、唯一本づゝ

並木のやうに、倒さずに残しておきました。それはお猿が木から木に傳はつて來る道として残しておいたものであります。但しそれらの木の根元は、みな鋸で切りはなしてありまして、それには縄が引張つて倒れないやうにしてありました。そうしてお猿が小屋の上に飛びおりた時に、直ぐにその縄を切つてしまひます、それらの樹木が一度にドツと倒れますから、お猿が逃げて行く道がなくなるやうにしてありました。そうして小屋に最も近い大きな木が、唯だ一本のみ残してありました。それは逃げ場を失つた猿が、その木に登る爲であります。そうして小屋の中に獵犬が三足隠してありました。それはお猿が小屋から下へ飛びおりた時に、直ぐにその犬が飛び出でゝ、噛み付くやうにしかけたのでありま

す。斯うしてお猿の來るのをじつと待つてゐます、お猿はそんなことは夢にも知らず、いつものやうに群をなして、また騒がしくやつて來てその小屋を揺りかけました。待ち構へてゐた木挽さんは、スワ今こそ鎌を以て、縄をスカツと切り放ちました。樹木はバタバタと倒れました。獵犬は忽ち飛び出でゝ、大きな聲でワンワンと上を向つて吠へ付きました。お猿はびつくりしてサア大變だ、さうして逃げやうか、小屋の上から、目を丸くして見ておりましたが、多くのお猿は思ひ切つて、小屋から飛びおりて一生懸命に、山の奥へ逃げて去りました。

所が五疋の大猿小猿は、遂に逃げ場を失つて、小屋の傍の大きな木に、おのゝきおびへつゝかけ登りました。そこで木挽はサアしめた、

よく切れる鋸を手持つて、その木に登つて下の方から、段々に枝を切り放して、お猿に近づいて行きました。追ひ詰められたお猿たちは、も早や何とも致し方なく、その中四疋は命がけで、高い處から飛びおりましたが、たつた一疋の親猿は、逃げそこなふておちくしつゝ、下を向いて困り切つておりました。見れば一疋の母猿が可愛らしい兒猿を胸にかゝへて、救ひを求めておるのであります。然しながら木挽さんは、この猿だけはさうしても、生捕にしないでほならないと、勇んで登つて行きました。まさにお猿の足元まで、進んだ時に母猿は、スワ大變と考へて、勇氣を振つて飛びおりました。下に構へた獵犬らは、直ちにその猿に噛み付きました。然しお猿は一生懸命で、力の及ぶ限り逃げ出しましたが、いづれにしても三疋の犬が、

烈しい勢ひで追ひかけるので、とても遁がるゝこゝも出來ずに、遂にいばらの中に隠れて、その兒を守つておりましたが、獵犬は直ちに飛び付いて可哀相にも、この母猿を遂に噛み殺してしまいました。

木挽さんは木からおり、犬の後から追ひ驅けて、お猿の死んだのを見た時に、この母猿は可愛い兒を、自分のお腹の下に抱へて、紅の血に染りつゝその上にうつむいて死んでおりました。木挽はつくづくこの様を見て、あゝ可哀相だこの母猿は、我が兒の爲に大切な、命を捨てゝその兒を守つた。あゝ人間でも及ばない慈けの深い親猿であつたと、今は自分の企てが、悪くあつたことを後悔して、兩眼からほろ／＼涙を流ししばらくの間は黙想に耽り、心に竊かに念佛を稱へ、大切に死骸をお寺に運び、懇ろにお經をあけて葬つたといふこゝであります。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。